

もう一人の私へ

福島 和人

何年前かに、こちらの大学に俳優の森繁久彌さんが講演にいらっしゃったということを、ちらっと新聞で見たことがありましたが、その時、次のようなお話をされたを書いてあったように思います。

人間の生活はちょうど家に縁側があるように心の縁側が要る。ということ、ゆとりといいますが、心の余裕、豊かさといいますが、そういうことの大切さをおっしゃったのでしょうか。大変、学生の皆さんも、感銘を受けておられたという記事でした。

それで、私はそのお話をヒントに更にもう少し考えさせていただいたわけです。と申します

のは、家に縁側があると本当に有難いんです。夏は涼しいし、今頃であればガラス越しにぽかぽか暖かいんです。しかし皆さん、どうでしょうか。たとえ縁側があっても、冬ならばそこを照らしてくれるお日様が当たらないと、寒くていられないわけです。折角縁側があってもお日様が当たらないと、どうにもならないわけです。ということは、森繁久彌さんのお話を更に発展させていただくと、大事なのはそのお日様が当たっておるかということになります。当たっておれば、にこにこそこへ坐っておられるわけですから。

私は今日、「もう一人の私へ」というタイトルをお願いしたのですが、私たちの中には、そのお日様に当たる「私」というものがあります。私を励ましてくれたり、叱ってくれたり、そういうことのできるかけがえのない「もう一人の私」というものが確かに私たちの中に働いている。そのことをお話しして、失礼したいと思います。

さて、その「もう一人の私」というのは、例えば浄土真宗では阿弥陀仏とも申します。阿弥陀仏というと、何か古いなあということになるのですが、本当に私たちや世界全体を生かしてくれている、一つの生命、その働きを阿弥陀仏といいます。それを私は、「もう一人の私」と名付けたいわけです。

もう一人の私へ

これは皆さんの上にも働いているわけです。もちろん私にも働いてくれています。その生命というのは、言ってみれば空気のようなものですから、普段は何も有難味を感じません。空気がなくなれば大変なことなんですが……、まあ、親みたいなものです。お父さん、お母さんというのは、「お願いします」と言わなくても、私たちのことを思ってくれているはずです。そう無意識のうちに思っていますから、皆さんも、ある意味で安心して学校へも来ておられるわけです。

ところが、その働いている生命を私知ったら、感覚できたらもっと素晴らしいだろうと思うのです。

例えば、皆さんの中に、だれも自分のことを気にかけてくれる人はいないと思いつ込んでいる方があるかも知れません。事実は案外、だれか素敵な方が、思っているかも知れないのですが……。言葉や態度に出さないからわからないけれども……。しかし、もしそういう人がいるということ、皆さんがわかったなら、ものすごくうれしいはずです。その瞬間から、すっかり世の中がバラ色に見えることになるでしょう。

これと同じように、私たちの中には本当に私を思い照らしてくれている「私」があるので

す。それを仏さんというのですが、それに気が付いたら、もっといいわけですね。

ところで、新聞などに、二、三年に一回、よく日本人の好きな漢字の統計が出ています。字というのは、その時代、時代の人々の心の動きを反映しますから面白いのですが、例えば、

和・愛・敬・幸・美

などは、必ず多くの人の好きな漢字の十傑に入っています。皆さんも、きっとこれなら好きだとおっしゃる字があるはずです。

そこで申し上げたいのですが、それでは例えば、この中の「愛」というのはどういうことなのかと。普通、何かを愛していると言いますと、つまり自分の気に入っているという意味の場合が多いと思いますが、『万葉集』などを読みますと、そういう意味で愛するという言葉が出てこないと習ったことがあります。どちらかというと、相手をいつくしむとか、相手のことを悲しむとか、思いやるとかという意味に使われていると聞きます。

ところが、今日、何かを愛しているという場合、よく考えてみると、大抵は自分の気持ち、つまり自分の好みや理想、人間関係についていうなら、自分の気質や好み、考え方に合っている時に、「愛している」という場合が普通のようなのです。従ってそれは、好きという言葉と同じ

もう一人の私へ

ことで、嫌いになったらオジャンになるわけです。自分の氣に入るか入らぬかというわけですから、氣に入らず都合が悪くなったらお終いというわけです。

ところで、愛というのは本当にそういうことなのだろうか、それでいいのだろうかというところが、今日、私のお話ししたいことなのです。そのことを考えるための一つのお話があります。お釈迦様の前生譚にこういうお話があります。

お釈迦様——その頃はまだお若い頃で、シッダルタ太子と呼ばれておりましたが——ある日、いとこのダイバダッタと二人で森へ遊びに行った。太子はそこで一羽の白鳥を見付けた。ダイバダッタは弓がうまく、その白鳥を見付けてバツと射たところが、見事に命中してはたばたともがきつつ鳴きながら遠くの方へ落ちていった。それで二人は、その白鳥を追いかけた。矢が当たって、苦しんでいるところを先に見付けたのは、シッダルタ太子の方でした。そこで争いが起こったわけです。

シッダルタ太子は僕が先に見付けたのだから自分のものだ、ダイバダッタはこれは僕の腕で落としたのだから自分のものだ、奪い合いになったのです。

皆さんは、どちらのものだと思われませんか。二人の若者もやはり、どうにも争いが収まらな

いので、インド中の賢者に集まってもらって、意見を出してもらったのです。ところが、一人一人がいろいろに異なった意見を言い合って、ますます収まらなくなってしまった。そこで最後に、その中で最も齢のいった長老に裁いてもらうことになったのだそうです。長老はこうおっしゃったのです。

「すべての生命は、それを愛そう愛そうとする者のものであって、それを傷つけよう傷つけようとする者のものではない」と。

そうしますと、これまでやかましかったその一座は、水を打ったようにシーンとなってしまう。あまりに厳かな言葉であったからでしょう。

こういうお話を聞きますと、私たち自身の生命ということを考えてみるだけでも、一体傷つけているのか、愛しているのか、果たしてどうなのかということをつくづく考えさせられるわけです。

実は今日、もう一つどうしても紹介したいと思っている一つの作文があります。お読みになった方があるかも知れませんが、『兎の眼』という小説をお書きになった灰谷健次郎という作家がおられます。大阪の小学校で先生をしておられたのですが、今はもう教師もやめて、淡路

もう一人の私へ

島に土地を求めて、自然農法の農業をやりながら、小説を書いておられるそうですが、その灰谷さんが先生をしておられた時の、小学校三年生の子の作文です。

私も灰谷先生の講演で、その作文を二度ばかり聞いたのですが、聞く度に考えさせられました。どういう内容かといいますと、小学校三年生のやす子ちゃんという子が泥棒したのです。お店からチューインガムを一つ盗ったのです。そのことでお母さんが首根っ子を掴まえて、「叱って下さい」と、先生のところに謝りに連れてこられたのです。その時先生は、その子をじっと見つめ、チューインガム一つくらいかまわないではないかとかばうことをせずに、本当にその子に、自分のやったことから逃げないで向かい合わせ、反省させるために、作文を書かされたのです。灰谷先生は、この時のことについて、こうおっしゃっていました。「ひと言書いては泣いた。自分の反省記だから、一行書いては泣いていた」と。

せんせい おころんにとって

せんせい おころんにとってね

わたし ものすごくわるいことした

わたし おみせやさんの
チューインガムとってん
一年生の子とふたりで
チューインガムとってしもてん

すぐ みつかってしもた
きつと かみさんが

おばさんに しらせたんや
わたし ものもいわれへん
からだが おもちやみたいに
カタカタふるえるねん
わたしが一年生の子に

「とり」いうてん

一年生の子が

「あんたもととり」いうたけど

もう一人の私へ

わたしはみつかったらいややから
いややいうた

一年生の子がとった

でも わたしがわるい

その子の百ばいも千ばいもわるい

わるい

わるい

わるい

わたしがわるい

おかあちゃんに

みつからへんとおもったのに

やっぱり すぐ みつかった

あんなこわいおかあちゃんのかお

見たことない

あんなかなしそうなおかあちゃんのかお

見たことない

しぬくらいたかれて

「こんな子　うちの子とちがう　出ていき」

おかあちゃんはなきながら

そない　いうねん

わたし　ひとりで出て行ってん

いつでもいくこうえんにいったら

よその国へいったみたいない気がしたよ

せんせい

どこかへ　いってしまお　とおもた

もう一人の私へ

でも なんぼあるいても

どこへも行くところあらへん

なんぼかんがえても

あしばかりふるえて

なんにも かんがえられへん

おそうに うちへかえって

さかなみたいにおかあちゃんにあやまってん

けど おかあちゃんは

わたしのかお見て ないてばかりいる

わたしは どうして

あんなわるいことしてんやろ

もう二日もたっているのに

おかあちゃんは

まだ さみしそうにないている

せんせい くないしよう

(灰谷健次郎著『せんせいけらいになれ』理論社)

こういう詩なんですね。これを一行書いてはすすり上げ、泣きじゃくりしながら書いたのだそうです。それを先生は、何時間もじっと見守っておられたようです。私はこの中から、いろいろのことを教えられるわけです。

最近スーパーの店員の方から聞いた話ですが、お母さんと一緒に買い物に来た女の子が、ちょっと何かを盗る、それを店員に叱られても、若いお母さんの方が、「こんなもの、弁償すればいいんでしょ」とお金を出してさっさと帰ってしまったことがあったそうです。随分、違うわけですね。

やす子ちゃんのお母さんは、チューインガム一つを許さないわけです。泣いて怒っている。つまり、怒るといふのは親にとっては悲しみでもあるわけです。顔は怒っているけれども、心では泣いているわけです。そこで先生を信頼しておられたのでしょう、先生のところへ連れて行かれた。その時に先生は、その子をちゃんと自分自身に向き合わせられたわけですね。こう

もう一人の私へ

いう作文が出てくるということは、恐らくもうこの子はこれから大丈夫ということではないでしょうか。ここまで自分を見つめたら、恐らくじっとしておれないで、お母さんに謝るのはもちろんですが、自分に謝らざるを得ない感じ、つまり「私悪かったよう」というような気持ちが出てきたに違いはないと思うのです。謝り果てるという姿ですね。

こういう子供の作文を読みますと、自分の根性と変わらないどころか、もっと自分の根性の方が悪そうで弁解が難しいですね。この中には、試験の時カンニングをしたことがないという方は多いと思います。普通は大学に近づくにつれてカンニングが多くなるということですが、私ちよっとええ格好をしますが、本当にカンニングをしたことはないのです。これは別に私が正しかったわけではないので、勇気があまりなかったことと、自分を押さえる力がちよっと強かっただけのことです。カンニングはやったことはありませんが、しかし、悪い嘘はついたことがあるのです。私、お寺に生まれまして、小学校の頃から父の代わりに村の家によくお参りをしました。小さい頃ですから、遊びたいです。冬でもメンコとかビー玉を村の友だちとやるわけです。つい巻き込まれて夢中になってやっておりますと、気が付いたら暗くなってしまうのです。それで折角隣村へまで行っても大体が嫌なお参りはかなわんわけですから

お参りせずに帰ってきて、そこでとうとう嘘をついてしまいました。家へ帰って、夜、父に聞かれて「ちゃんとお参りしてきた」とボソツと言ってかくしてしまったわけです。一カ月に一回お参りする家ですから、次の月まではわからないのです。その家の人もおかしいと思うわけでしょうが、田舎のことで忙しく、今日のように電話ありませんので、言ってもきません。その翌月、父親がお参りに行くわけです。その日は嘘がばれるのが恐くて、どうにもならなかったですね。夕方やっぱり父親が、なんともいえない恐ろしい顔で帰ってきました。恐らく祖先の大切な命日にお参りしてもらえなかったと言われたでしょう。さんざん叱られた上、結局自分で謝りに行きました。私の親はそんなに偉い親ではないのですが、悪いことをした時には、お前が謝れということで、絶対代わってくれない親でした。それは、今でも有難いと思っています。

ところが最近といっても、特に戦後ですが、全体的な傾向として自分を見つめるというような方向が非常に弱くなっているのですね。そのために、かえって自分だけでなく他をも損っているということが随分あるように思います。

この「チューインガム一つ」という作文では、小学校三年生の子が、その自分への見据えを

もう一人の私へ

きちっとやり遂げたわけです。「お母ちゃん堪忍して」「先生許して」と言ったのです。先生も可愛いですから「よしよし、チューインガム一つのことや、大したことない」と言いたいのでしょうけれども、あくまでそれを自分の正面に見据えさせる。子供はそういう謝り果てるというところから、育つわけです。たとえば言いますと、堅い岩盤が破れて、きれいな地下水がパッと出てくるといったらよいでしょうか。人間の成長にはそういう場面が必ずあるようです。先にも言いましたように、私たちは自分の都合とか好みに合わせて生活しています。それに合わないという「嫌い」というのですから、本当にあきれるほど自分本位の世界です。それで相手を傷つける。相手を傷つければ、傷ついた相手は気持ちの持って行き場がありませんから、必ずこちらへ返してきます。それでお互いが傷つきあう世界が展開するわけです。そのことは、いろんな人間関係において出てきます。

そのような世界にあって、私たちはどうしたら本当に生き生きとした生き方ができるのでしょうか。自分の中に流れている地下水のようなものを汲み上げるために、自分の殻を破らなければ駄目なのです。破るのは痛いのです。痛いし辛いし苦しいです。しかし、これを破らなければ、本当の自分が出てこないということがあるのです。

お釈迦様はそのような小さな自分の殻を破って本当の自己に目覚めた人は、自分を他と比べて他より優れているとも劣っているとも論じないし、また他と等しいとも論じないのだと説いておられます。ところが、普通私たちは、他人と自分を比較して、あの方より私は頭が悪い、という具合に自分を卑下するわけです。これを卑下慢といいます。そういう時、あの人は勉強は私よりできるけれども、スタイルは私の方がいいと、そういつて劣等感を埋め合わせようとする。これを増上慢といいます。それもできないような場合には、自分は大したことはないが友だちも大したことはない、大体みんなよく似た程度で、あまり変わらないというところで安心しようとする。それは等慢といいます。皆、慢心です。私たちは、毎日これをやっています。本当に自分を生きてゆく気持ちちが、弱まってきているからでしょうか。

自分の生命に目覚めないと、自分というものが本当にわかりませんから、相手を本当にわかるということがないのです。その意味では自分を見付けようと努め、自分がわかると本当に相手にも出会えます。良い書物にも出会えます。私も、そういう生命に出会わせていただいで、そういう意味では、いろんなことをしながら、教えていただきました。ところがそうしますと、やはりじっとしておれないという気持ちが出てくるのです。自分というものにじっとしておれ

もう一人の私へ

ない、いい加減なことをしておれないということです。

実は私、四大公害問題といわれる水俣病と十年ほど前から隣りがあります。実際、水俣に行ったこともあります。それは別に社会福祉のために行ったなどというのではなくて、現代の社会の病根を確かめたい、水俣病とは一体どういうことなんだろうと思うとじっとしていられなくて——もちろんその前から何人かの水俣の被害者の人たちと知り合いになっていたのです——行ったのです。

水俣病というのは、皆さんも高校の社会科で習っておられると思いますが、実際は教科書に書いてある以上に深刻なものなのです。どういう状態かといいますと、水俣のチッソの化学工場の排水口から流れ出す無機水銀が、ヘドロと一緒に湾へ流れ出て、それが有機水銀に変わる。するとそれが海藻に吸収されその海藻をプランクトンが食べ、それを小さい魚が食べ、それを更に大きな魚が食べて、だんだん体に凝縮されて溜まるのです。そして、その魚を人間が食べるわけです。水俣は半農半漁というよりもお米は殆ど穫れないところですから、海からの魚をよく食べるのです。そういう生活が続く中で、工場は毒を出しとらんと言い続けました。が、今から三十年ほど前から被害が出だしたのです。水銀というのは、身体の臓器とか脳とい

うところへ集まるそうです。そうすると脳の神経がやられて、狂い死にしたりするわけです。詳しい様子は石牟礼道子さんの書かれた『苦海浄土』（講談社文庫）という本の中に出ていますから、ぜひ読んでいただきたいと思います。

それで女性の皆さんに関係することを一つ紹介します。お母さんが魚を食べますと、そこに含まれている水銀が胎盤を通してその胎児に吸収されます。水銀は生殖細胞とか脳細胞というところに集まるのです。それで赤ちゃんが生まれますと、お母さんはいつの間にか水俣病の症状が軽くなる代わりに、生まれてきた赤ん坊は見るも無残な障害を持った姿で生まれてくるのです。私の知っている方で、お姉さんがそういう形で亡くなった方がおられます。そういう時のお母さんの気持ちなんていうものは、一体どんなものなのでしょう。私は曾て母親としてそのような苦しい残酷な体験をされた一人のお婆さんに会って、当時の様子を聞き取ったことがあります。吉本モエさんというもう七十歳近くの小柄で非常に可愛い感じのお婆さんで、ご主人も二人の子供さんも水俣病にかかったそうですが、その娘さんのことを次のように話されました。

もう一人の私へ

△長女の発病▽

子供は、最初病気が足に來たですよ。何でこんなにあるかな、それまでは、お父さんのとってきたしなものを、学校行くのを人よりも一時間早く出てふくろ（近くの袋部落）なんか売ってしまつて、おくれてでも学校行きよつたわけですよ、魚売り行かねば明日の米が買えんもんね……。それは親孝行な。六年を卒業する時には、親孝行の賞状までもらつたんです。それで、その子が病氣になつて、私は片えだ打ち落とされたような気持ちをしました。

△村人の反応▽

子供が最初病氣になつた時も、たかちゃんがくるから早う逃げよ……とみな逃げしまつて……歩くことが出来んから、ここ（右手）にもここ（左手）にもぞうりばはかせて、ごそごそやってほうて友達のところへ行きよつたですよ。友達も逃げよつたので、それを追うてずつとほうていきよつたんです。それが残念がつてですね……。

（福島和人著『等身大の思想』文明堂）

原因不明の病氣、これは気持ちが悪いです。正直なところ、私も子供の頃、当時は癩病といわれたハンセン氏病の患者さんのいる家へ、一月一回必ず行くのですが、これがいやでたまら

なかったです。手に包帯巻いてその方が部屋におられると恐かったです。もちろん、今は違った見方をしますが……。

当時水俣では、猫や人が狂って、叫びをあげて次々と死んでいくということが起こってきました。だから伝染病と違うか、奇病と違うかと皆が恐れ、いやがったわけなのです。

現在でも、交通事故などでお父さんやお母さんを亡くした場合、欠損家庭とか片親だとか母子家庭という言い方をします。本当に人間社会は、残酷なところがあります。被害者になると、大抵差別をされる立場に立ってしまうのです。だから結婚しようと思っても、あの家は片親がいらないからといって反対する人がいるわけです。

水俣病の患者のいる家でも、今日そういう問題で反対されることもあるそうです。たまたまこの方はよい男性に巡り会って結婚できて、その後病状も大分よくなりました。立って炊事なども、できるようになったのです。ですから、この吉本モエさんは、「自分の娘を病気でいいからといって貰ってくれた人は、仏さんだと思った」と言うておられました。

本当に現代の人間社会には、例えていえば自分が汚ないとかかわんから、それを洗うというのであればいいのですが、汚れを相手になすりつけて、それで相手を汚しておいて「お前は汚

もう一人の私へ

ない」というような面があるのではないかと思います。水俣病にしても、加害者たちは、自分たちの罪をずっと認めなかったのです。十年ほど前、やっと認めて補償もなんとかしおしおし始めているようですが、もちろん企業だけがそのような姿勢であるというわけではないのです。そういうことがいくらでも起こる体質を、現代の社会ははらんでいるということなのです。

これは結局のところ私たちを生かしてくれている、私たちに働いてくれている、生命というものがわからなくなった、またわがろうとしない人間の姿勢に問題があるのだと思います。つまり、そういう人間が、政治をしたり、教育をしたり、医療をしたり、産業を行ったりしていることの問題なのです。

一人一人の生命の働きを知ることとは、決して小さなことではないのです。それに目覚めると、いろいろと出会いに恵まれてきます。本当に素敵な人にも出会えます。いろんな過去の人にも出会えます。そういう心が、そういう「自分」に生き、そして縁ある人々と共に生きた人が、過去にも一杯いたからです。

『万葉集』と『昭和万葉集』から歌をいくつか紹介しておきます。例えば『万葉集』の、人

間性を詠っては名人といわれる山上憶良の歌に、こういうのがあります。

憶良等は 今は罷^まらむ 子哭^なくらむ

その彼の母も 吾^わを待つらむそ

憶良は下級の、国司という役人をしておりましたが、大変な忙しい一日の仕事が終わったのでしよう。さあ帰ろう。子供が泣いて自分を待っているだろう。「その彼の母も」というのは、自分の妻です。それが「吾を待つらむそ」、自分の帰りを心待ちしていよう、さあ早く帰ろうという非常に素朴な歌です。難しい論理も哲学も何も必要ないのです。人間の中には、こういう計算を超えて出てくる、心の世界があります。

これもご存知でしょうが、防人の歌にこういうのがあります。

からころも 裾に取りつき 泣く子らを

おきてぞ来ぬや 母^{はは}なくにして

防人ですから、東国地方から三年間、九州まで徴兵で行かねばならないわけです。東北から難波津、つまり大阪の港まで弁当弁で徒歩でやって来て、そこから九州まで、瀬戸内海を舟で行ったようですが、九州での三年間に、命を落とす人もいるわけです。その防人の一人が詠っ

もう一人の私へ

たのです。子供が裾にとりついて「お父さん行くな」というわけです。なぜかというところには「母」つまり母が死んでしまっていて既にいないからです。それを突き離して置いて、自分は遠く九州まで来てしまった。その子供たちは、今頃どうしているかな、という切ない父親の心です。

過去にでも現代でも、こういう心がどこにでも一杯生まれてきているのです。もう三首だけ紹介します。これは『昭和万葉集』（全二十巻、講談社）といって、昭和に入ってから五十年間の、日本人の生活の歴史を詠った歌が、選抜されて載っている歌集の中の歌です。一つは、お父さんの戦死の報が入った時の歌です。お母さんが、遊んでいた子供を呼び寄せて、

遊びの 子を呼び寄せて 手を握り

静かに父の 戦死をば言う

あるいは、

祭壇に 届かぬ吾子の手を取りて

戦死の夫に 焼香をさす

と。それから、一方、幸いに無事に終戦後帰ってきた夫を迎えた、妻の喜びもあります。

寄り添えば 体悲しくにおうなり

確かに夫は 帰り来ませり

妻ならば、そういう喜びが出るのだと思います。喜びにつけ、悲しみにつけ、そういう命の共感が、現代にも過去にも、皆お互いの中に働いているのです。従って、また、他人と比較しなくても、お互い自分の中に、本当の自分になっていくとする生命の芯ともいえそうなものが、生きているのです。

最後に、もう一言申し上げて終わりたいと思います。皆さんは将来いい男性に巡り会い、結婚したいと思っておられるでしょうが、そこでお願ひしたいのは、こういうことなのです。つまり、お婿さんを選ぶ決心は、「私」がすること、そのことだけはだれがなんと言おうと、絶対譲ってはならないということです。最後は私、つまり自分の中に出てくる本当の気持ち、本心に従うということです。

私たちは、自分を他人と比較して負けたら、女性であれば旦那さんを比較する、終いには子供まで比較する。そういうことをやるから、自分が見えなくなり他人の良さも見えなくなってしまうのです。

もう一人の私へ

ともかく、譲れないのは本当の自分の気持ちでしょう。だから、相手の人が、たとえ腕が一本取れたとしても、この方と一緒に生きてゆこうというものが、本当に自分の中にあるかどうかというところで、決められたらいいと思うのです。そうでないと、嫌いになったら離婚しなければならぬことになります。ましてや、結婚式の段取りなどは、みんなの都合を立てて決めればいいだけのことです。ただ、相手だけは譲ってはいかんです。これは、本当に自分に働いている、「本当の私」の声に聞かねばならないのです。

「もう一人の私」というのは、そういうことなのです。私たちが普通、私、私と言っているのは、みな「自我」というものです。これが見栄を張ってみたり、ひがんでみたり、相手を悪く言ってみたりするのです。そして、こういう根性がなくなると気付いた時に、本当に自分の本心に帰れるのです。そうすると、他との出会いも出てくるものです。そして、そこに温かい人生が開けてきます。どうか、「もう一人の私」を学生生活を通して大事に育てていただきたいと思います。

——一九八一・一・二八——